

# 『古今集』恋の部一から恋の部二までの構造

— 左右対称の対応関係という観点からの分析 —

平 沢 竜 介

『古今集』巻十、物名の部の巻軸歌468から恋の部一の巻頭歌から十八首目の歌486までの歌群を示すと以下のようになる。<sup>注1</sup>

「は」をはじめ、「る」をはてにて、「ながめ」をかけて時の歌をよめ、と人の言ひければよみける

僧正聖宝

468 花のなか目に飽くやとてわけゆけば心ぞとも散りぬべらなる

題しらず

読人しらず

469 郭公鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな

素性法師

470 音にのみきくの白露夜はおきて昼は思ひにあへず消ぬべし

紀貫之

471 吉野川岩波高く行く水のはやくぞ人を思ひそめてし

藤原勝臣

472 白波の跡なき方に行く舟も風ぞたよりのしるべなりける

在原元方

473 音羽山おとに聞きつつ逢坂の関のこなたに年を経るかな  
474 立ちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつつ白

波

475 世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり

つらゆき

右近の馬場の引折の日、むかひにたてたりける車の下簾より女の顔のほのかに見えければ、よんでつかはしける

在原業平朝臣

476 見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさむ

返し

読人しらず

477 知る知らぬなにかあやなくわきて言はむ思ひのみこそしるべなりけれ

春日祭にまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家を尋ねてつかはせりける

壬生忠岑

478 春日野の雪間をわけておひいでくる草のはつかに見えし君はも

人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人の

もとに、のちによみてつかはしける

つらゆき

479山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

題しらず

もとかた

480たよりもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり

凡河内躬恒

481初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかなつらゆき

482逢ふことは雲居はるかに鳴る神の音に聞きつつ恋ひわたるかな

読人しらず

483片糸をこなたかなたに縊りかけてあはずはなにを玉の緒にせむ

484夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて

485刈菰の思ひ乱れて我恋ふと妹知るらめや人し告げずは

486つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆き寝とはしのばむ

468から486までの歌群は、468は「花を見飽きるかと思つてその中に分け入ると、花の美しさに惹かれて私の心も花とともに散つてしまひそうだ」と、花を見飽きることなくずっと見続けてしまひそうだと詠じ、486も「おくとは嘆き寝とはしのばむ」とずっと恋し続ける様を詠じ共通する。469は「あやめも知らぬ恋もするかな」、485は「思ひ乱れて我恋ふ」と恋に思い乱れた様

を詠じて対応する。470は「音にのみきく」人を「夜はおきて昼は思ひにあへず消ぬべし」、484は「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ」と、470は「夜」「昼」、484は「夕暮」に恋しい人を思い続ける様を詠じて対をなし、471は「吉野川岩波高く行く水の」、483は「片糸をこなたかなたに縊りかけて」といづれも序詞を用いて共通する。472は「白波の跡なき方に行く舟も」、482は「雲居はるかに鳴る神の」といづれも遠方を意識した歌を詠じて共通し、473が「音羽山おとに聞きつつ」、481が「初雁のはつかに声を聞きしより」といづれも類音の繰り返しによつて続く語を導く枕詞を用いて、音や声を聞くと詠じて対応する。474が「よそにても人に心をおきつ白波」と詠ずるのに対し、480は「心を人につくるなりけり」と類似した表現を取り、475は「目に見ぬ人も恋しかりけり」、479は「ほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」と、これも類似した表現を用いて対をなす。476が「右近の馬場の引折の日、むかひにたてたりける車の下簾より女の顔のほのかに見えければ、よんでつかはしける」という詞書を持ち、「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくは」と表現するのに対し、478は「春日祭にまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家を尋ねてつかはせりける」という類似した詞書を有し、かつ「草のはつかに見えし君はも」と478同様かすかに女性の姿を見たことを詠じて対応する。468から486までの歌群は、477を中心に同心円状に左右対称の対応構造を形成する。

また、468から475までの歌群は、468が「目に見ぬやとて」、475が「目に見ぬ人も」と、いづれも「目」という語を詠み込んで対応し、469が「郭公鳴くや五月のあやめぐさ」、474は「よそに

ても人に心を」と、どちらも序詞ないし序詞に準じた表現を用いて対をなす。470は「音にのみきく」、473は「おとに聞きつつ」と、ともに「音に聞く」という表現を共有し、471は「吉野川岩波高く行く水の」、472は「白波の跡なき方に行く舟も」と「波」の語を共有し、「行く水」、「行く舟」と類似した表現を用いて対応する。468から475までの歌群は、471と472の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

468から471までの歌群は、468が「花」、469が「菖蒲草」、470が「菊」というように全て花を詠じてそれぞれが相互に対応し、469は「郭公鳴くや五月のあやめぐさ」、470は「きくの白露」、471は「吉野川岩波高く行く水の」と、いずれも序詞を用いて三首それぞれが相互に対応する。また、468は「わけゆけば」、471は「行く水の」と「行く」の語を共有して対応する。その結果、468から471までの歌群は、歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応することになる。468から471までの歌群は、469と470の対を中心に歌群内の全ての歌が相互に対応するという左右対称の対応構造を持つ歌群を形成する。

472から475までの歌群は、472は「跡なき方に」、473は「こなたに」、474は「よそにても」といずれも場所を示す表現を用いて共通し、475の「目に見ぬ人も恋しかりけり」という表現は、473の「おとに聞きつつ逢坂の関のこなたに年を経るかな」、474の「よそにても人に心をおきつ風」という表現と、まだ違っていない人を恋しく思う様を詠じて共通する。さらに475は472と「風」の語を共有して対応する。とすると、472から475までの歌群も、468から471までの歌群と同様、473と474の対を中心に歌群内

のそれぞれの歌が歌群内の他の歌と全て対応するという左右対称の対応関係を構成することになる。

475から479までの歌群は、475は、「目に見ぬ人も恋しかりけり」、476は「見ずもあらず見もせぬ人」、478は「はつかに見えし君はも」、479は「ほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」と、四首とも「見る」の語を詠み込んで共通する。また、その四首のうちようど真ん中に配置された477は、「見る」の語を詠じていないが、その直前に位置する476の「右近の馬場の引折の日、むかひにたてたりける車の下簾より女の顔のはのかに見えければ、よんでつかはしける」という詞書に対し、477は「返し」という詞書を持つ。ということとは、476と477は贈答歌ということになり、対応関係を持つことになる。また、478は「春日祭にまかれりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家を尋ねてつかはせりける」、479は「人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、のちによみてつかはしける」という詞書を持つことから、476と同様、かすかに見た人に贈った歌ということになり、477はこれらの歌への返歌と見做すことができよう。また、475もまだ見たこともない人を恋しく思う歌であるが、477はこの歌に対する答歌と解することもできよう。とすると、475、476、478、479の「見る」を詠み込む四首は、477と対応関係を持つと考えられ、475から479までの歌群内の歌は、それぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と相互に対応するという対応関係を有することとなり、475から479までの歌群は、477を中心に左右対称の対応関係を構成することになる。

479から486までの歌群は、479は「人の花摘みしける所にまかり

て、そこなりける人のもとに、のちによみてつかはしける」という詞書を持ち、「ほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ」という表現を持つのに対し、486は「つれもなき人をやねたく」「おくとは嘆き寝とはしのばむ」と表現して、いずれも長い間ある人を思い続けている様を詠じて対をなし、480は「たよりもあらぬ思ひ」であるのに「心を人につくるなりけり」と詠ずるのに対し、485は「妹知るらめや人し告げずは」といずれも相手に知られない恋の思いを詠じて対応する。481は「初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかな」、484は「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」と、いずれも漠然とした物思いを詠じて対をなし、482は「逢ふことは雲居はるかに鳴る神の」、483は「片糸をこなたかなたに縊りかけて」と何れも序詞を用いて対応する。479から486までの歌群は、482と483の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

479から482までの歌群は、479は「見てし人こそ恋しかりけれ」という表現が、480の「心を人につくるなりけり」という表現、「ほのかにも見てし人」という表現が、481の「はつかに声を聞きしより」という表現と対応し、480は「思ひ」に「火」、「心を人につくる」に「心を寄せる」という意味に「火」を「付ける」の意の「付く」を掛け、481は「中空」の語に「中天」の意と「心が上の空になる」の意が掛けられ、482は「雲居はるかに鳴る神の音に聞きつつ」の「鳴る」に「成る」、「音に聞く」に「噂に聞く」の意を掛けるというように、いずれも掛詞を用いて相互に対応する。さらに479は、「山ざくら霞の間より」という序詞が、482の「雲居はるかに鳴る神の」という序詞と対応す

る。その結果、479から482までの歌群は、480と481の対を中心に歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという左右対称の対応構造を構成する。

483から486までの歌群は、483は「こなたかなたに」、484は「雲のはたてに」といずれも場所を示す表現を用いて共通し、また、483は「あはずはなにを玉の緒にせむ」と詠じて、485は「妹知るらめや人し告げずは」という表現と「ずは」という仮定表現を用いて共通する。484は「天つ空なる人」、485は「人し告げずは」、486は「つれもなき人をやねたく」といずれも「人」の語を詠み込んで共通する。さらに、483は「あはずはなにを玉の緒にせむ」、486は「人をやねたく」「おくとは歎き寝とはしのばむ」と、いずれも意志の助動詞「む」を疑問文に用いて共通する。とすると、483から486までの歌群も、484と485の対を中心に歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の歌全てと対応するという左右対称の対応関係を形成する。

以上述べてきたことから、468から486までの歌群は、477を中心に同心円状に左右対称の対応構造を形成するとともに、468から475までの歌群は471と472の対を中心に、479から486までの歌群は482と483の対を中心に、いずれも同心円状に左右対称の対応関係を形成することになる。

また、468から475までの歌群は、469と470の対を中心に歌群内の全ての歌が相互に対応する468から471までの歌群と、473と474の対を中心に歌群内の全ての歌が相互に対応する472から475までの歌群によつて構成され、475から479までの歌群は477を中心に歌群内の歌が相互に全て対応する歌群を形成し、479から486までの歌群

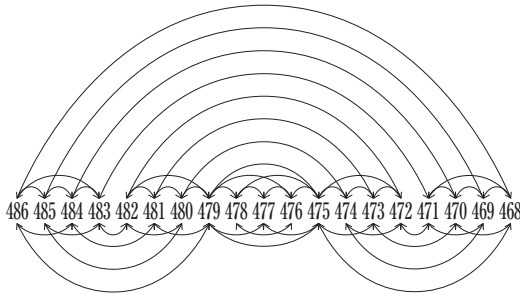


図 1

は、480と481の対を中心に歌群内の全ての歌が相互に対応する479から482までの歌群と、同じく484と485の対を中心に歌群内の全ての歌が相互に対応する483から486までの歌群によって構成されることになる。468から486までの歌群は、このように五つの歌群にも分けられるが、その場合も、五つの歌群の中心にある475から479までの歌群が477を中心に左右対称の構造を形成し、472から475までの歌群と479から482までの歌群が477を中心に左右対称の対応関係を形成し、468から471までの歌群と483から486までの歌群も477を中心に左右対称の対応関係を形成することから、これら五つ

の歌群は、477を中心に左右対称の対応構造を形成することになる。以上検討してきた468から486までの対応関係を図示すると、図1となる。

次に486から502までの歌群を示すと、以下のようになる。

(題しらず)

(読人しらず)

486 つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆き寝とはしのばむ

487 ちはやぶる賀茂の社の木綿襷ひと日も君をかけぬ日はなし

488 わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

489 駿河なる田子の浦波たたぬ日はあれども君を恋ひぬ日ぞなき

490 夕月夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋もするか  
な

491 あしひきの山下水の木隠れてたぎつ心を堰きぞかねつる

492 吉野河岩きりとほしゆく水の音には立てじ恋ひは死ぬとも

493 たぎつ瀬のなかにも淀はありてふをなかかわが恋の淵瀬ともなき

494 山高み下ゆく水の下にのみ流れて恋ひむ恋ひは死ぬとも

495 思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ恋しきものを

496 人知れず思へばくるし紅の末摘花の色にいでなむ

497 秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや恋ひむ逢ふよしを

なみ

498 わが園の梅のほつえに鶯の音に鳴きぬべき恋もするかな  
499 あしひきの山郭公わがごとや君に恋ひつつ寝ねがてにす  
る

500 夏なれば屋戸にふすぶる蚊遣り火のいつまでわが身下燃  
えをせむ

501 恋せじと御手洗川にせし禊ぎ神はうけずぞなりにけらし  
も

502 あはれてふことだになくは何をかは恋の乱れの束ね緒に  
せむ

486 から502までの歌群は、486が「つれもなき人を」「おくとは嘆  
き寝とはしのぼむ」と自らにつれない人をずつと恋しく思っ  
ている辛さを詠ずるのに対し、502は「あはれ」という言葉がな  
かったら、「何をかは恋の乱れの束ね緒にせむ」、つまり「あ  
はれ」という言葉によって、自らの内に秘めた恋の思いをなんと  
かこらえているというように、どちらも自ら心の内に秘めてい  
る思いを相手に受け入れてもらえぬ恋の辛さを詠じて対応する。  
487は「ちはやぶる賀茂の社の木綿襷」、501は「恋せじと御手洗  
川にせし禊ぎ神はうけずぞ」といずれも神事に関する事柄を詠  
じて共通し、488と500はどちらも漫然と恋の物思い耽っている様  
を詠じて対応する。489は「君を恋ひぬ日ぞなき」、499は「君に  
恋ひつつ寝ねがてにする」といずれも長い間君に恋している状  
態を詠じ、490は「夕月夜さすや岡辺の松の葉の」、498は「わが  
園の梅のほつえに鶯の」と、ともに序詞を用い、かつ「恋もす  
るかな」という表現を第五句に共有して対をなす。491は「あし

ひきの山下水の木隠れて」、497は「秋の野の尾花にまじり咲く  
花の」と、いずれも序詞を用い、かつ491は「たぎつ心を堰きぞ  
かねつる」、497は「色にや恋ひむ逢ふよしをなみ」といずれも  
恋の気持ちをこらえきれず思いを表してしまいそうな状況を詠  
じて対応する。492は「あしひきの山下水の木隠れて」、496は  
「紅の末摘花の」と、ともに序詞を用いて共通するとともに、  
492が「音には立てじ恋ひは死ぬとも」と恋の苦しきで死んだと  
しても、自分の思いを声に出すまいと詠ずるのに対し、496はそ  
れとは対照的に「人知れず思へばくるし」「色にいでなむ」と  
恋の苦しきのあまり思いを外に表してしまおうと詠じて対をな  
す。493は「たぎつ瀬のなかにも淀はありてふを」、495は「いは  
ねばこそあれ恋しきものを」といずれも逆接構文を取って共通  
する。486から502までの歌群は、494を中心に同心円状に左右対称  
の対応関係を構成する。

486 から493までの歌群は、486は「おくとは嘆き寝とはしのぼ  
む」、493は「なかわがが恋の淵瀬ともなき」と、どちらも長い  
間ずつと恋い続けている様を詠じて共通し、487は「ちはやぶる  
賀茂の社の木綿襷」、492は「吉野河岩きりとほしゆく水の」と  
いずれも序詞を用いて対をなす。488は「思ひやれども行く方も  
なし」と詠ずるのに対し、491は「たぎつ心を堰きぞかねつる」  
と詠じ、「行く方もなし」と「堰きぞかねつる」という対照的  
な表現を用いて対をなし、489は「君を恋ひぬ日ぞなき」、490は  
「いつともわかぬ恋もするかな」と常に恋する様を詠じて対応  
する。486から493までの歌群は、489と490の対を中心に同心円状に  
左右対称の対応構造を形成する。

495から502までの歌群は、495は「いはねばこそあれ恋しきものを」、502は「あはれてふことだになくは何をかは恋の乱れの束ね緒にせむ」と、ともに恋の思いを言葉に発することに言及して対応し、496は「色にいでなむ」と思いを表そうとする意志を示すのに対し、501は「恋せじと御手洗川にせし禊ぎ」と「恋をすまい」という意志を示した表現を用いて対をなす。497は「秋の野の尾花にまじり咲く花の」、500は「夏なれば屋戸にふすぶる蚊遣り火の」と序詞を用いて共通し、498は「わが園の梅のほつえに鶯の」、499は「あしひきの山郭公」といづれも鳥を詠み込んで共通する。495から502までの歌群は、498と499の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

また、493は「たぎつ瀬のなかにも淀はありてふを」、494は「山高み下ゆく水の下にのみ流れて」といづれも水の流れを詠じて共通し、494は「山高み下ゆく水の」、495は「思ひいづるときはの山の岩躑躅」といづれも序詞の中に山を詠み込み共通する。493と495の対応は右に述べた。とすると、489と490の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。486から493までの歌群と、498と499の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。495から502までの歌群は、494を中心に左右対称の対応関係を構成することになる。

486から490までの歌群は、486は「おくとほ嘆き寝とはしのばむ」、487は「ひと日もきみをかけぬ日はなし」、488は「思ひやれども行く方もなし」、489は「たたぬ日はあれども君を恋ひぬ日ぞなき」、489は「いつともわかぬ恋するかな」といづれもずっと恋し続ける様を詠じて共通する。486から490までの歌群は、歌

群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応し、488を中心に左右対称の対応関係を形成する。

490から494までの歌群は、490は「夕月夜さすや岡辺の松の葉の」、491は「あしひきの山下水の木隠れて」、492は「吉野河岩きりとほしゆく水の」、494は「山高み下ゆく水の下にのみ」といづれも序詞を用いて共通し、493は「たぎつ瀬のなかにも淀はありてふを」と「水の流れ」を詠じて、491、492、494と対応し、「なとかわが恋の淵瀬ともなき」と詠じて490の「いつともわかぬ恋もするかな」という表現と対応する。すなわち、490から494までの歌群は、歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の全ての歌と対応し、492を中心に左右対称の対応関係を形成する。

494から498までの歌群も、494は「山高み下ゆく水の」、495は「ときはの山の岩躑躅」、496は「紅の未摘花の」、497は「秋の野の尾花にまじり咲く花の」498は「わが園の梅のほつえに鶯の」といづれも序詞を用いて相互に対応する。494から498までの歌群も、歌群内のそれぞれの歌が歌群内の他の歌全てと対応すること、496を中心に左右対称の対応関係を形成する。

498から502までの歌群は、498が「音に鳴きぬべき恋もするかな」、499が「寝ねがてにする」、500が「下燃えをせむ」、501は「せし禊ぎ」、502は「束ね緒にせむ」といづれも「す」という動詞を用いて共通する。498から502までの歌群は、歌群内のそれぞれの歌が同じ歌群内の他の全ての歌と対応するという対応関係を構成し、500を中心に左右対称の対応関係を構成する。

486から502までの歌群は、486から493までの歌群が489と490の対を中心に、495から502までの歌群は、498と499の対を中心に、いづれ

も同心円状に左右対称の対応関係を構成するが、さらにこの二つの左右対称の対応関係は、493、494、495の三首がそれぞれ他の二首と対応関係を持つことで、486から502までの歌群が494を中心に左右対称の対応関係を構成する。また、486から490までの歌群、490から494までの歌群、494から498までの歌群、498から502までの歌群は、その歌群内部で全ての歌が他の全ての歌と対応するという対応関係を有し、それぞれ488、492、496、500を中心に左右対称の対応関係を形成する。と同時に、486から490までの歌群、490から494までの歌群、494から498までの歌群、498から502までの歌群の四つの歌群も、494を中心に左右対称の対応構造を形成する。こ

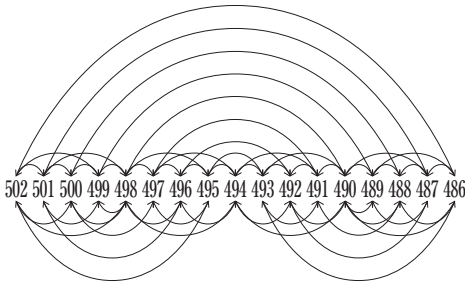


図 2

うした対応関係を図示すると、図 2 となる。  
 続いて 502 から 522 までの歌群を示してみよう。

(題しらず)

(読人しらず)

502 あはれてふことだになくは何をかは恋の乱れの東ね緒に  
 せむ

503 思ふには忍ぶることぞまけにける色にはいでじと思ひし  
 ものを

504 わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知る  
 らめ

505 浅茅生の小野の篠原忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに  
 506 人知れぬ思ひやなぞと葦垣のまちかけれども逢ふよしの  
 なき

507 思ふとも恋ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆく解く  
 る下紐

508 いで我を人などがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふころ  
 ぞ

509 伊勢の海に釣する海人の泛子なれや心ひとつを定めかね  
 つる

510 伊勢の海の海人の釣り縄うちはへてくるしとのみや思ひ  
 わたらむ

511 涙川なに水上を尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり

512 種しあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひば逢はざら  
 めやも

513 朝な朝な立つ川霧の空にのみうきて思ひのある世なりけ  
 り



514 忘らるる時しなれば葦鶴の思ひ乱れて音をのみぞなく  
515 唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人は恋しき

516 よひよひに枕さだめむ方もなしかに寝し夜か夢に見え  
けむ

517 恋しきに命をかふるものならば死にはやすくぞあるべか  
りける

518 人の身も慣らはしものを逢はずしていざこころみむ恋ひ  
や死ぬると

519 忍ぶればくるしきものを人知れず思ふてふこと誰に語ら  
む

520 来む世にもはやなりなむ目の前のつれなき人を昔と思  
はむ

521 つれもなき人を恋ふとて山彦のこたへするまで歎きつる  
かな

522 行く水の数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけ  
り

502 から522までの歌群は、502は「あはれ」という言葉がなかった  
なら、何を「恋の乱れの束ね緒」にしよう、520は「来む世」に  
早くなくて欲しい、そうしたら「目の前のつれなき人」を過去  
の人だと思おうと、いずれもある状況を想定し、そうした状況  
になったらどうしようかと考えている点で共通し、503は「思ふ  
には忍ぶることぞまけにける色にはいじと思ひしものを」、  
521は「山彦のこたへするまで嘆きつるかな」と、いずれも恋の  
思いを表したことを詠じて対応する。504は「わが恋を人知  
るらめや」、522は「思はぬ人を思ふなりけり」と、ともに自分

を思ってくれない人を思う様を詠じて対をなし、505は「忍ぶと  
も人知るらめやいふ人なしに」、519は「忍ぶればくるしきもの  
を人知れず思ふてふこと誰に語らむ」と忍んで恋している状態  
にあつて、その思いを誰かが誰かに伝えることを想像している  
様を詠じて対をなす。506と518はともに「逢ふ」の語を詠み込み  
つつ、恋しい人に逢えない状態を詠じて共通し、507は「思ふと  
も恋ふとも逢はむものなれや」と、どんなに思っても逢えない  
と恋の苦しみを詠じ、517はこの恋の苦しさを命に代えることが  
できるならば、死ぬことなどたやすいことだと、いずれも恋し  
い人に逢えない苦しみを詠じて対をなす。508は「大舟の」、「ゆ  
たのたゆたに物思ふころぞ」、515は「唐衣」「返す返すぞ人は恋  
しき」と、いずれも枕詞と繰り返しの表現を用いて対をなし、  
509は「心ひとつを定めかねつる」、516は「よひよひに枕さだめ  
む方もなし」と、ともに「定む」という語を詠み込んで対をな  
す。510は「伊勢の海の海人の釣り繩」、513は「朝な朝な立つ川  
霧の空にのみ」という序詞を用いて対応し、511は「物思ふ時の  
わが身なりけり」、514は「忘らるる時しなれば」といずれも  
「時」という語を詠み込んで対応する。

502 から522までの歌群は、502と520の対と503と521の対と504と522の  
対、それに508と515の対と509と516の対、510と513の対と511と514の対  
がそれぞれ交差しつつも、512を中心に同心円状に左右対称の対  
応関係を構成する。

507 から512までの歌群は、507と512が逢うことを詠じて対応し、  
508が「物思ふころぞ」、511が「物思ふ時の」といずれも「物思  
ふ」の語を詠み込んで共通し、509は「伊勢の海に釣する海人の

泛子」、510は「伊勢の海の海人の釣り繩」と、どちらも伊勢の海人の漁具を詠み込んで対をなす。507から512までの歌群は、509と510の対を中心に同心円状に左右対称の対応構造をなす。

512から517までの歌群は、512と517が逢うことを詠じて対をなし、513が「朝な朝な」、516が「よひよひに」といづれも初句に時を表す対照的な表現を用いて対応し、514は「忘らるる時しなれば」、515は「唐衣ひもゆふぐれになる時は」と「時」の語を共有して対応する。512から517までの歌群は、514と515の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

509と510の対を中心に同心円状に左右対称の対応構造をなす507から512までの歌群と、514と515の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する512から517までの歌群は、六首の歌が、中央に位置する二首の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する点で、同様の対応関係を形成しており、かつ両者はその歌群の最後と最初が512であることから、509と510の対を中心とした507から512までの歌群と、514と515の対を中心にした512から517までの歌群は、512を中心に左右対称の対応関係を形成することになる。

さらに、508から511までの歌群は、508は「大舟のゆたのためたに」、509は「伊勢の海に釣する海人の泛子」、510は「伊勢の海の海人の釣り繩」、511は「涙川なに水上を尋ねけむ」といづれも海ないしは川、つまり水を詠じて共通し、四首の歌が他の三首の歌とそれぞれ対応するというように、508から511までの歌群は、509と510の対を中心に四首の歌が全て対応関係を持つ左右対称の対応構造を形成し、513から516までの歌群も、513が「朝な朝な」、

514が「忘らるる時」、515が「ゆふぐれになる時」、516が「よひよひに」といづれもある時を示して、四首それぞれが相互に対応する。513から516までの歌群も、514と515の対を中心に四首全てが相互に対応関係を持つ左右対称の対応構造を構成する。

この509と510の対を中心に歌群内の全ての歌が対応関係を持つ508から511までの歌群と、514と515の対を中心に歌群内の全ての歌が対応関係を持つ513から516までの歌群も、512を中心に左右対称の対応関係を形成する。

502から506までの歌群は、502が「何をかは恋の乱れの束ね緒にせむ」、504は「わが恋を人知るらめや」と何れも反語表現を用いて共通し、503は「思ふには忍ぶることぞまけにける色にはいでじと思ひしものを」と恋の思いを表してしまった状態、505は「忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに」と恋の思いを隠している状態と、正反対の状態を詠じて対応する。504は「わが恋を人知るらめや」、506は「人知れぬ思ひやなぞ」とどちらも恋しい人に知られない恋を詠じて共通する。また、505は「忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに」、506は「人知れぬ思ひやなぞと葦垣のまぢかけれども逢ふよしのなき」と類似した表現を取って対応する。502から506までの歌群は、505と506が対をなすと同時に、502と504、503と505、504と506が、それぞれ一首おきに対応関係を持つことになる。

518から522までの歌群は、518は「人の身も慣れてしまえばどうにもなるものだから、逢わずにいたら恋い死にすることがあるか試してみよう」、520は「早く来世になつてほしい。目の前の冷淡な人を前世の人とおもうだろうから」と、どちらもある条

件を仮定し、それが実現した時のことを想像している点で対応する。519は「忍ぶればくるしきものを」、「思ふてふこと誰に語らむ」、521は「つれもなき人を恋ふとて山彦のこたへするまで嘆きつるかな」と、思いを心の内に収めておくことが苦しいので、言葉に出して言う、ないし言おうとする状態を詠じて共通する。520は「つれなき人を昔と思はむ」、522は「はかなきは思はぬ人を思ふなりけり」と、いずれも自分につれない人への思いを詠じて対をなす。また、518は「人の身も慣らはしものを」、519は「忍ぶればくるしきものを」と、ともに「ものを」という終助詞を用いた表現を取って対をなす。518から522までの歌群は、518と519が対をなし、518と520、519と521、520と522が対応するというように、一首おきに三組の歌が連続して対応する。

502から506までの歌群と518から522までの歌群は、同様の対応関係をもち、506と518は512からそれぞれ六首目に位置することから、502から506までの歌群と518から522までの歌群は、512を中心に左右対称の対応構造を構成することになる。

なお、506は「まぢかけれども逢ふよしのなき」、507は「思ふとも恋ふとも逢はむものなれや」、512は「恋をし恋ひば逢はざらめやも」、517は「恋しきに命にかふるものならば」、518は「逢はずしていざこころみむ」といずれも逢うことを詠じて対応する。その結果、506、507、512、517、518の五首は、それぞれの歌が他の四首の歌全てと対応するという形の対応関係を形成するが、この対応関係も512を中心に左右対称の対応関係を構築することになる。

502から522までの歌群は、502と520の対と503と521の対と504と522の

対、それに508と515の対と509と516の対、510と513の対と511と514の対がそれぞれ交差しつつも、512を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成すると同時に、507から512までの歌群が509と510の対を中心に、512から517までの歌群は514と515の対を中心にいずれも同心円状に左右対称の構造をなし、それら二つの歌群は、512を中心に左右対称の対応構造を形成する。また、508から511までの歌群は509と510の対を中心に、513から516までの歌群も514と515の対を中心に、それぞれ四首の歌が全て対応関係を持つ左右対称の対応構造を形成するが、この508から511までの歌群と513から516までの歌群も、512を中心に左右対称の対応関係を形成する。さらに、502から506までの歌群と518から522までの歌群は、505と506、518と519がそれぞれ対をなしつつ、一首おきの三組の歌が対をなすが、それらも512を中心に左右対称の対応関係を形成し、506、507、512、517、518の五首は512を中心に左右対称の形でそれぞれが相互に対応する。以上述べてきた502から522までの歌群の対応関係を示すと、図3となる。

518から542までの歌群を示してみよう。

(題しらず)

(読人しらず)

518人の身も慣らはしものを逢はずしていざこころみむ恋ひや死ぬると

519忍ぶればくるしきものを人知れず思ふてふこと誰に語らむ

520来む世にもはやなりなむ目の前のつれなき人を昔と思はむ

521つれもなき人を恋ふとて山彦のこたへするまで歎きつる

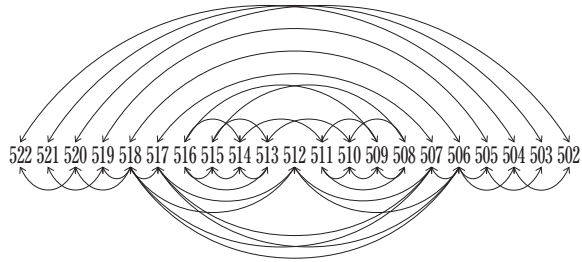


図 3

かな

522 行く水の数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

523 人を思ふ心は我にあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

524 思ひやるさかひはるかになりやする迷ふ夢路に逢ふ人の

なき

525 夢のうちにあひ見むことを頼みつつ暮せるよひは寝むか  
たもなし

526 恋ひ死ねとするわざならしうばたまの夜はすがらに夢に  
見えつつ

527 涙川枕流るるうき寝には夢もさだかに見えずぞありける  
528 恋ひすればわが身は影となりにけりさりとて人に添はぬ  
ものゆゑ

529 篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の川に浮きて燃ゆる  
む

530 篝火の影となる身のわびしきは流れて下に燃ゆるなりけり

531 はやき瀬にみるめ生ひせばわが袖の涙の川に植ゑましもの

532 沖辺にも寄らぬ玉藻の波のうへに乱れてのみや恋ひわた  
りなむ

533 葦鴨のさわぐ入江の白波の知らずや人をかく恋ひむとは  
534 人知れぬ思ひをつねに駿河なる富士の山こそわが身なり  
けれ

535 飛ぶ鳥の声も聞えぬ奥山の深き心を人は知らなむ

536 逢坂の木綿つけ鳥もわがごとく人や恋しき音のみなむ  
む

537 逢坂の関に流るる岩清水いはで心に思ひこそすれ

538 浮草の上はしげれる淵なれや深き心を知る人のなき

539 うちわびて呼ばはむ声に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ

思ふ

540心がへするものにもが片恋はくるしきものと人に知らせむ

541よそにして恋ふればくるし入紐の同じ心にいざ結びてむ

542春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我に解けなむ

518から526までの歌群と534から542までの歌群は、518は人の身も慣れてしまえばどうにでもなるものだから、恋しい人と「逢はずしていざこころみむ恋ひや死ぬると」と詠ずるのに対し、540は「心を取りかえることができたらいいなあ、そうしたら片思いは苦しいものだ」と恋しいあの人に知らせてやろう」と、どちらもあることを前提としてそこから何かを試みるという構文を取って、恋の苦しい思いを表現している点で共有する。519は「忍ぶればくるしきものを」、541は「よそにして恋ふればくるし」と、どちらも「何々すれば苦しい」という表現を上句に置き、それに続いて519は「人知れず思ふてふこと誰に語らむ」、541は「入紐の同じ心にいざ結びてむ」と、いずれも意志を表す助動詞「む」で終わる表現を配して共通する。520の「来む世にもはやなりなむ」という表現と、542の「君が心は我に解けなむ」という表現は、いずれも他に對してあつらえ望む意を表す「なむ」いう終助詞を用いて對をなす。521は「山彦のこたへするまで嘆きつるかな」、539は「山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ」と「山彦」を詠じて共通し、522は「行く水の数かくよりもはかなきは」、538は「浮草の上はしげれる淵なれや」といずれも「水」を詠じて対応する。523は「人を思ふ心は我にあらねばや」、535は「深き心を人は知らなむ」といずれも「人」「心」の語を

詠み込んで對をなし、524は「逢ふ人のなき」、536は「逢坂の」とともに「逢ふ」こと、ないし「逢ふ」ことを連想させる語を詠み込みながら、逢うことのできない状態を詠じ、かつ524は「さかひはるかになりやする」、536は「人や恋しき」といずれも疑問文の形を取って對をなす。525は「夢のうちにあひ見むことを頼みつつ」、537は「いはで心に思ひこそすれ」と恋の思いを表すことなく過ごす様を詠じて対応する。526は「うばたまの夜はすがらに夢に見えつつ」、534は「人知れぬ思ひをつねに駿河なる」と、常に恋の思いをすると詠じて對をなす。518から526までの歌群と534から542までの歌群は、518と540の對、519と541の對、520と542の對という三組の對、および523と535の對、524と536の對、525と537の對という三組の對が交差してはいるが、526と534が530からともに四首目に位置することから、530を中心に左右対称の対応関係を形成する。

502から522までの歌群の検討において、先に述べたように、518から522までの歌群は、518と519が對をなすと同時に、それぞれ一首おきに対応関係を持つことを指摘した。

538から542までの歌群も、538は「深き心を知る人のなき」、540は「心がへするものにもが」といずれも「心」の語を詠み込み、恋しく思っている人が自らの思いを知ってくれない辛さを詠じて対応し、539は「苦しみのあまり叫ぶ声に山彦が応えないことはない」、541は「離ればなれで恋しても苦しい。入れ紐のように二人が同じ心になって契りを結ぼう」と、ともに「苦し」の語を用いて、自らの思いに相手が答えてくれることを望んでいることを詠じて對をなす。540は「心がへするものにも

が、542は「君が心は我に解けなむ」といずれも「心」の語を詠み込み、「つれない人と心を入れ替えて片思いは苦しいものだ知らせよう」、542は「あなたの心は私に打ち溶けてほしい」と、どちらも、相手の心が自分の心と一つになることを願って共通し、542は「君が心は我に解けなむ」、541は「入紐の同じ心にいざ結びてむ」とともに「心」の語を詠み込みつつ、恋しい人と結ばれることを詠じて対をなす。

538から542までの歌群は、541と542が対をなし、538と540、539と541、540と542がそれぞれ対応して、一首おきに三組の歌が連続して対応するというように、518から522までの歌群と同様の対応関係を正反対の向きに形成する。しかも522と538は、518から542までの歌群の中心530から八首目にある。その結果、518から522までの歌群と538から542までの歌群は、530を中心に左右対称の対応関係を形成することになる。

522から528までの歌群は、522は「思はぬ人を思ふなりけり」、523は「人を思ふ心は我にあらねばや」と、それぞれ自らを思ってくれない人を詠じて対応し、523は「身のまどふだに」、524は「迷ふ夢路に」とともに「まどふ」の語を詠じて共通する。524から527までの四首はいずれも「夢」の語を詠じて四首全てが相互に対応し、527は「夢もさだかに見えずぞありける」、528は「わが身は影となりにけり」と「夢」や「我が身が」はつきり見えなくなつたと詠じて対応する。また、524から527までの「夢」の歌群の外側に位置する523と528は、523が「身のまどふだに」、528が「わが身は影となりにけり」と「身」の語を共有して対応する。522から528までの歌群は、522と523が対をなし、524か

ら527までがそれぞれ「夢」を詠じて四首全てが相互に対応し、「夢」の歌群の前に位置する523は「夢」の歌群の一首目524と対応し、「夢」の歌群の後に位置する528は「夢」の歌群の最後に位置する527と対応すると同時に、523と528が対応するという対応関係を構築する。

532から538までの歌群は、532は「沖辺にも寄らぬ玉藻の波のうへに」、533は「葦鴨のさわぐ入江の白波の」といずれも「波」の語を詠み込んだ序詞を用いて共通し、533から536までの四首は、全て「人」の語を詠み込んで相互に全て対応し、536と537はともに「逢坂」を詠じて対をなす。また、532は「沖辺にも寄らぬ玉藻の波のうへに」、537は「逢坂の関に流るる岩清水」といずれも「水」を詠み込んだ序詞を用いて共通する。532から537までの歌群は、533から536までの四首は、いずれも「人」の語を詠み込んで四首全てが相互に対応し、「人」を詠ずる歌群の前に位置する532は「人」の歌群の冒頭に位置する533と対応し、「人」を詠ずる歌群の後に位置する537は、「人」の歌群の最終歌536と対をなし、かつ532と537は対応関係を持つ。

522から528までの歌群の対応関係と532から538までの歌群の対応関係は、全く対称的な形の対応関係を形成し、かつ530が528と532の中間に位置することから、530を中心に左右対称の対応関係を構成する。

528から532までの歌群は、528は「わが身は影となりにけり」、529は「篝火にあらぬわが身のなぞもかく」、530は「篝火の影となる身のわびしきは」といずれも「身」の語を詠み込んで三首が相互に対応し、529は「なぞもかく涙の川に浮きて燃ゆらむ」、

530は「流れて下に燃ゆるなりけり」、531は「涙の川に植ゑまじものを」といづれも涙が流れる様を詠み込んで相互に対応する。

さらに、528は「さりとして人に添はぬものゆゑ」、531は「はやし瀬にみるめ生ひせば」といづれも「逢う」ことを詠じて対応する。先に、528から530までの歌群が「身」の語を共有して相互に対応し、526から534までの歌群が涙の流れる様を詠み込んで相互に対応すると指摘したが、528と531が逢うことを詠じて対応するとすると、528からも531までの四首はそれぞれ相互に対応する一つの歌群を形成することになる。また、527は「涙川」を詠じて、529から531までの歌群と対応するが、527の「さだかに見えずぞありける」と528の「わが身は影となりけり」という表現は、ともにはっきり見えない様を詠じて共通する。その結果、527から531までの歌群は全ての歌が相互に対応する。

529、530、531は涙の川を詠じて共通するが、532は「沖辺にも寄らぬ玉藻の波の上に」、533は「葦鴨のさわぐ入江の白波の」といづれも「波」を詠じており、529から533までの歌群は全て「水」を詠じて対応する。

つまり、527から533までの歌群は、527から531までは歌群内の歌が歌群内の他の歌と全て対応し、529から533までの歌群の歌も全て水の上に浮かぶ物を詠じて相互に対応するという歌群を形成することになる。

なお、この527から533までの歌群は、518から522までの歌群と522から527までの歌群を連結した518から527までの歌群と、533から538までの歌群と538から542までの歌群を連結した533から542までの歌群を結びつけることになり、518から542までの歌群は、530を中心

に左右対称の対応構造を構築することになる。以上述べてきた518から542までの歌群の対応関係を図で示すと、**図4**となる。

542から恋の部一の巻軸歌51までの歌群を示して見よう。

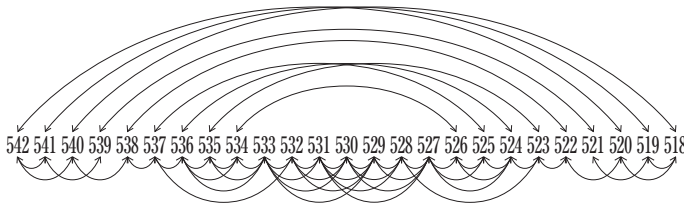


図4

(題しらず)

(読人しらず)

542 春立てば消ゆる氷の残りなく君が心は我に解けなむ

543 明けたてば蟬のをりはへなきくらし夜は螢の燃えこそわ  
たれ

544 夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてな  
りけり

545 夕さればいとど干がたきわが袖に秋の露さへ置き添はり  
つつ

546 いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしか  
りけり

547 秋の田の穂にこそ人を恋ひざらめなどか心に忘れしもせ  
む

548 秋の田の穂うへを照らすいなづまの光の間にも我や忘る  
る

549 人目もる我かはあやな花すすきなか穂にいでて恋ひず  
しもあらむ

550 淡雪のたまればかてにくだけつつわが物思ひのしげき  
ろかな

551 奥山の菅の根しのぎ降る雪の消ぬとかいはむ恋のしげき  
に

542から551までの歌群は、542は「春立てば消ゆる氷の」、551は「奥山の菅の根しのぎ降る雪の」と序詞を用いて共通し、かつ

542が「残りなく君が心は我に解けなむ」と恋の成就を願うの  
に  
対し、551は「消ぬとかいはむ恋のしげき」と恋の思いに耐え  
かねて死んでしまいそうだと詠じて対をなす。543は恋の思いで

昼は泣き暮らし夜は我が身を燃やして暮らしている、550は「わが物思ひのしげきころかな」と恋の物思ひがしきりに起こるこの頃だと、いずれも辛い恋の物思ひをしている状態を詠じて共通する。544は「夏虫の身をいたづらになすことも」「549は「花すすきなか穂にいでて」と、ともに虫や薄がある状態になる様を詠み込むとともに、544が恋の思いで死んでしまうことを詠ずるのに対し、549は恋の思いを表に表そうとする意志を示すという点で対照的な内容を詠じて対をなす。545の「いとど干がたきわが袖に秋の露さへ置き添はりつつ」と548の「秋の田の穂うへを照らすいなづまの光」という表現は、いずれも秋の情景を詠じているが、どちらも何かの上になんかが置いたり、降り注いだりする状態を表現して対をなす。546はいつだって恋しくない時は無いけれど、秋の夕暮れは特に恋しさが募ると、秋の夕べの恋の苦しさを強調するのに対し、547は「穂にこそ人を恋ひざらめなどか心に忘れしもせむ」は、恋の思いを表に表すことはないが、心の中ではいつでも思い続けていると対照的な内容を詠じて対をなす。542から551までの歌群は、546と547の対を中心に同心円状に左右対称の対応構造を形成する。また、542は「春立てば消ゆる氷の」、543は「開けたてば蟬の」、550は「淡雪のたまればかてに」、551は「奥山の菅の根しのぎ降る雪の」といずれも序詞を用いて対応する。

542は「君が心は我に解けなむ」と相手は自分に打ち解けるのを願うのに対し、549は「なか穂にいでて恋ひずしもあらむ」と自ら恋の思いを相手に伝えると詠じ、いずれも恋が成就することを積極的に願っている点で共通し、543と550はずつと苦しい



恋の思いを続けている様を詠じて対応する。544は恋の思いで身をいたずらにする、551は恋の物思いの激しさに死んでしまいそうだと、ともに恋の物思いで死んでしまいそうな様を詠じて対をなす。545、546はいずれも秋の夕暮れの恋の思いの切なさを詠じて対をなし、547、548はともに常に恋しく思っていると詠じて対をなす。と同時に、秋の夕暮の恋の切なさを強調する545、546の対と常に恋の思いにとらわれている547、548の対は、対照的な内容を詠じている点で対応する。

以上述べてきたように、542から551までの歌群の対応関係も546と547の対を中心に左右対称の対応関係を形成する。この542から551までの歌群の対応関係を示すと、**図5**となる。

『古今集』恋の部一は、物名の部の巻軸歌468から恋の部一の486まで歌群、486から502までの歌群、502から522までの歌群、518から542までの歌群、542から551までの歌群という五つ左右対称の対応構造を持つ連続した歌群で構成され、『古今集』の巻頭歌と対応する468は486、486は502、502は518、518は542と対応し、542から恋

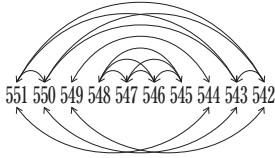


図5

の部一の巻軸歌551に対応することになる。

\*

続いて、恋の部二の対応構造の分析に移ろう。『古今集』恋の部一の巻軸歌551と恋の部二の巻頭歌552から560までの歌群を示して見よう。

(題しらず)

(読しらず)

551 奥山の昔の根しのぎ降る雪の消ぬとかいはむ恋のしげき

に

題しらず

小野小町

552 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざら

ましを

553 うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめ

てき

554 いとせてめて恋しき時はうばたまの夜の衣を返してぞ着る

素性法師

555 秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼む暮るる夜ごと

に

下つ出雲寺に人のわざしける日、真静法師の導師に

て言へりけることを歌よみて、小野小町がもとに

つかはしける

安倍清行朝臣

556 包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

返し

こまち

557 おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつ瀬な

れば

寛平御時後の宮の歌合の歌 藤原敏行朝臣

558 恋ひわびてうち寝るなかに行きかよふ夢の直路はうつつ  
ならなむ

559 住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ

小野美材

560 わが恋はみ山がくれの草なれや繁さまされど知る人のな  
き

552と553は「寝」「人」「見」「夢」の語を共有して対をなし、554と555は「夜」の語を共有して対をなす。556と557は「袖」「玉」「涙」の語を共有し、558と559は「夢の直路」「夢の通ひ路」と類似した表現を用いて対をなす。559は「夢の通ひ路人目よくらむ」、560は「わが恋は」「繁さまされど知る人のなき」といづれも恋しい人にも思ってもらえない様を詠じて対応する。

また、551は「消ぬとかいはむ恋のしげきに」、552は「思ひつづ寝ればや人の見えつらむ」と、いづれもある理由から「消ぬとかいはむ」、「人の見えつらむ」という状態に至ったと詠じて共通し、553は「夢てふものは頼めそめてき」、554は「夜の衣を返してぞ着る」と、いづれも夢を頼りにしている様を詠じて対応する。555は「つれもなき人」、556は「人を見ぬめ」といづれも逢ってはくれない「人」を詠じて対をなし、557は「せきあへず」、558は「行きかよふ」と類似した表現を用いて対応し、559は「人目よくらむ」、560は「知る人のなき」と詠じて対をなす。以上のことから、551から560までの歌群は一首ごとの対応関係を形成していることになる。

551は「消ぬとかいはむ恋のしげきに」560は「繁さまされど知

る人のなき」といづれも恋の繁さを詠じて共通する。552は「夢」を詠じて558、559と対応し、553も「夢」を詠じて558、559と対応する。554は「うばたま」「衣」を詠じて、556の「袖」「白玉」、557の「袖」「玉」と対応し、555は「つれもなき人をぞ頼む」と詠じて、556が「人を見ぬめの涙なりけり」、557が「我はせきあへずたぎつ瀬なれば」とつれない人を恨む様を詠ずる歌と対をなす。

551から560までの歌群は、一首ごとに全ての歌が順次対応するとともに、552と553の対と558と559の対が全て対応し、554と555の対が556と557の対と全て対応して、555と556の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。その対応関係を図示すると、図6となる。

続く560から572までの歌群を示すと以下のようになる。

(寛平御時後の宮の歌合の歌)

小野美材

560 わが恋はみ山がくれの草なれや繁さまされど知る人のな

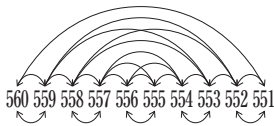


図6

き

紀友則

561よひの間もはかなく見ゆる夏虫に迷ひまさされる恋もする  
かな

562夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき  
563笹の葉に置く霜よりもひとり寝るわが衣手ぞさえまさり  
ける

564わが屋戸の菊の垣根に置く霜の消えかへりてぞ恋しかり  
ける

565川の瀬になびく玉藻の水隠れて人に知られぬ恋もするか  
な

壬生忠岑

566かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあ  
るかな

藤原興風

567君恋ふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞ我はなりけ  
る

568死ぬる命生きもやするところみに玉の緒ばかり逢はむ  
と言はなむ

569わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふものぞ人頼  
めなる

読人しらす

570わりなくも寝ても覚めても恋しきか心をいづちやらば忘  
れむ

571恋しきにわびて魂まどひなばむなしき骸の名にや残らむ

つらゆき

572君恋ふる涙しなくは唐衣胸のあたりは色もえなまし

560から572までの歌群は、560は「わが恋はみ山がくれの草なれや」、572は「君恋ふる涙しなくは」といづれもある条件を提示し、続く表現で560は「繁さまされど知る人のなき」、誰も自分の恋を知ってくれない、572は君を恋しく思う涙が無かつたら「唐衣胸のあたりは色もえなまし」、すなわち自分の恋が周りに知られてしまうと対照的な内容を詠じて対をなす。561は「迷ひまされる」、571は「まどひなば」と類似した表現を用いて対応し、562は「夕されば螢よりけに燃ゆれども」、569は「わびぬればしひて忘れむと思へども」といづれも逆接確定条件を表す助詞「ども」を用いた構文を取って共通する。563は「ひとり寝る」、570は「寝ても覚めても」とともに「寝」の語を詠み込んで共通し、564は「消えかへりてぞ」、568は「死ぬる命」と類似した表現で対応する。565は「水(身)隠れて」、567は「みをつくし(身を尽くし)」と「身」を掛詞として詠み込んで共通する。560から572までの歌群は、566を中心に同心円状に左右対称の対応構造を形成する。

また、560から563までの歌群は、560は「繁さまされど知る人のなき」、561は「夏虫に迷ひまさされる恋もするかな」、562は「螢よりけに燃ゆれども」、563は「ひとり寝るわが衣手ぞさえまさりける」といづれもある状態が勝っている様を詠じて相互に対応し、560から563までの歌群は、歌群内の全ての歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという対応関係を形成する。

564から566までの歌群は、564は「わが屋戸の菊の垣根に置く霜

の、565は「川の瀬になびく玉藻の」、566は「かきくらし降る白雪の下消えに」というように、いずれも序詞を用いて共通する。564から566までの歌群は、三首がそれぞれ相互に対応関係を持つことになる。

566から568までの歌群は、566は「消えて物思ふころにもあるかな」、567は「みをつくしとぞ我はなりける」、568は「死ぬる命生きもやすると」といずれも恋の思いで死んでしまいそうな様を詠じて共通する。566から568までの歌群も、三首それぞれが相互に対応する。

569から572までの歌群は、569は「わびぬれば」、570は「心をいづちやらば」、571は「恋しきにわびて魂まどひなば」、572は「君恋ふる涙しなくは」と順接仮定条件の構文を用いて共通する。569から572までの歌群は、歌群内の全ての歌が歌群内の他の全ての歌と対応するという対応関係を構成する。

すなわち560から572までの歌群は、歌群内の全ての歌が歌群内の他の全ての歌と対応関係を有する560から563までの歌群、564から566までの歌群、566から568までの歌群、569から572までの歌群の四つの歌群によって構成され、566を中心に左右対称の構成をなす。

さらに、564は563と「霜」の語を共有し、「菊の垣根に置く霜の消えかへりてぞ恋しかりける」と「消ゆ」の語を詠じて、562の「夕されば螢よりけに燃ゆれども」が、「燃ゆ」の語を詠み込むのと対をなし、565は「川の瀬になびく玉藻の水隠れて」、560は「わが恋はみ山がくれの草なれや」と、ともに「隠れ」という表現を共有して対応する。568は「玉の緒ばかり逢はむ」、

569は「しひて忘れむ」、570は「心をいづちやらば忘れむ」と類似した表現を取って対応し、567と572はどちらも「君恋ふる涙」という表現で始まっている点で共通する。

これら、564と562、565と560、568と570、567と572の対応関係も、566を中心に左右対称の対応関係を形成する。以上の検討より、560から572までの歌群は、566を中心に図7に示すような左右対称の対応関係を構築する。

572から600までの歌群は以下のようになる。

（寛平御時后の宮の歌合の歌）

つらゆき

572 君恋ふる涙しなくは唐衣胸のあたりは色もえなまし  
題しらず

573 世とともに流れてぞ行く涙川冬もこほらぬ水泡なりけり  
574 夢路にも露や置くらむ夜もすがら通へる袖のひちてかは

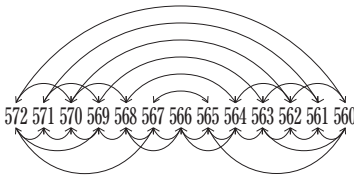


図7

かぬ

素性法師

575 はかなくて夢にも人を見つる夜は朝の床ぞ起き憂かりける

藤原忠房

576 いつはりの涙なりせば唐衣忍びに袖はしほらざらまし

大江千里

577 音に泣きてひちにしかども春雨に濡れにし袖と問はばこたへむ

としゆき朝臣

578 わがごとくものや悲しき郭公時ぞともなく夜ただなくらむ

つらゆき

579 五月山こず糸を高め郭公なく音空なる恋もするかな

凡河内躬恒

580 秋霧の晴るる時なき心には立ち居のそらも思はえなくに

清原深養父

581 虫のごと声にたててはなかねども涙のみこそ下に流るれ  
是貞親王の家の歌合の歌  
読人しらす

582 秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我おとらめやひとり寝る

夜は

題しらす

つらゆき

583 秋の野に乱れて咲ける花の色のちくさに物を思ふころかな

みつね

584 ひとりして物を思へば秋の田の稲葉のそよといふ人のなき

ふかやぶ

585 人を思ふ心は雁にあらねども雲居にのみもなきわたるかな

な

ただみね

586 秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の恋しかるらむ

つらゆき

587 真菰刈る淀の沢水雨降ればつねよりことにまさるわが恋

大和に侍りける人につかはしける

588 越えぬ間は吉野の山の桜花人づてにのみ聞きわたるかな

弥生ばかりに、ものたうびける人のもとに、また

人まかりて消息すと聞きて、よみてつかはしける

589 露ならぬ心を花に置きそめて風吹くごとに物思ひぞつく

題しらす  
坂上是則

590 わが恋にくらぶの山の桜花間なく散るとも数はまさらじ

宗岳大頼

591 冬川の上はこほれる我なれや下にながれて恋ひわたるらむ

む

ただみね

592 たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草のうきたる恋も我はする

かな

とものり

593 よひよひに脱ぎてわが寝る狩衣かけて思はぬ時の間もな

し

594 東路の佐夜の中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ  
595 したへの枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひすぞ

ありける

596 年を経て消えぬ思ひはありながら夜の袂はなほこほりけり  
り

つらゆき

597 わが恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふ心ぞわびしかりける  
る

598 紅のふりいでつつ泣く涙には袂のみこそ色まさりけれ

599 白玉と見えし涙も年経れば唐紅に移ろひにけり

みつね

600 夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひに燃えぬべらなり  
572 から600までの歌群は、572は「唐衣胸のあたりは色もえなまし」、600は「我も思ひに燃えぬべらなり」と、ともに恋の「思ひ」という「火」で燃えること詠じて対応し、573は「涙川冬もこほらぬ水泡なりけり」、599は「白玉と見えし涙も年経れば唐紅に移ろひにけり」といづれも「涙」を詠じ、かつ573は変化することのない涙、599は変化する涙を詠じて対をなす。574は「夜もすがら通へる袖のひちてかはかぬ」、598は「鳴く涙には袂のみこそ色まさりけれ」と、いづれも涙に濡れる袖を詠じ、575は「朝の床ぞ起き憂かりける」、597は「迷ふ心ぞわびしかりける」と類似した構文で類似した心情を詠じて対応する。576は「唐衣忍びに袖はしほらざらまし」、596は「夜の袂はなほこほりけり」と、いづれも涙に濡れる袖を詠じて対をなし、577が「音に泣き

てひちにしかども」、595が「したへの枕のしたに海はあれど」と、ともに逆接表現を用いて以下の表現に接続し、かつ袖や枕の下が涙に濡れる様を詠じて共通する。578が「時ぞともなく夜ただなくらむ」と詠ずるのに対し、594は「なにしか人を思ひそめけむ」といづれも原因理由を推測する助動詞を用いて共通し、579は「空なる恋もするかな」、592は「うきたる恋も我はするかな」と類似した表現を用いて対応する。580は「秋霧の晴るる時なき」、593は「かけて思はぬ時の間もなし」と、いづれも「時」が「ない」という表現を用いて対応し、581が「涙のみこそ下に流るれ」、591が「下にながれて恋ひわたるらむ」と「下にながる」という表現を共有して対をなす。582が恋の悲しさは秋になつて「山とよむまで鳴く鹿に我おとらめや」と詠ずるのに対し、590は私の恋に比べたら、「くらぶの山の桜花間なく散るとも数はまさらじ」と詠じ、いづれも自らの恋の思いが、鳴く鹿の思いの強さやくらぶの山に散る桜の数よりは勝っていると詠じて共通し、583と589はいづれも「花」を詠じ、かつ583が「物を思ふころかな」、589が「物思ひぞつく」という表現を取って対応する。584が「そよといふ人のなき」、588が「人づてにのみ聞きわたるかな」と対照的な表現を用いて対をなし、585は「人を思ふ心は雁にあらねども」という逆接表現が「雲居にのみも泣きわたるかな」と自らの行為を表す表現を導くのに対し、587は「真菰刈る淀の沢水雨降れば」という順接表現を用いた序詞が「つねよりことにまさるわが恋」という心情表現を導き出すという点で対応する。572から600までの歌群は、586を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構築する。

572から600までの歌群は、572は涙がなかったら胸は燃える、575は恋しい人を夢で見たら起きるのが辛いと、いずれもある条件のもとであることが起きると詠じて対をなし、573は「涙川」、576は「涙」を詠じて対応し、574は「通へる袖のひちてかはかぬ」、577は「春雨に濡れにし袖」と詠じて対をなす。575と578は「夜」の語を共有し、576は「涙」、579は「なく音空なる」といずれも泣く様を詠じて共通し、577は「春雨」、580は「秋霧」を詠じて対をなす。578は「郭公時ぞともなく夜ただなくらむ」、581は「虫のごと声にたててはなかねども」と、郭公や虫の鳴く様を詠じながら、いずれも自らの泣く様を表現して共通する。579は「五月山こず糸を高み郭公泣く音空なる」、582は「秋なれば山とよむまで鳴く鹿」と、夏に鳴く郭公、秋に鳴く鹿を詠じつつ、詠み手自らが泣いている様を詠じて対をなし、580は「秋霧の晴るる時なき」、583は「秋の野に乱れて咲ける花の色」といずれも秋の情景を詠じつつ、580は「晴るる時なき心には立ち居のせらも思ほえなくに」、583は「ちくさに物を思ふころかな」というように、ともに物思いする作者の心情を詠み込んで対応する。581は「声にたててはなかねども涙のみこそ下に流るれ」、584は「ひとりして物を思へば」「そよといふ人のなき」といずれも一人で物思いに耽っている様を詠じて共通し、582は独り寝をする夜は「秋なれば山とよむまで鳴く鹿に」私は劣ることなく泣いていると詠ずるのに対し、585は恋しい人を思ふ心は、雁が空を鳴いて渡って行くように上の空で泣き続けるばかりだと詠じて、ともに自身の泣く様を鹿や雁の鳴く様と比較して詠じて対応する。583が「秋の野に乱れて咲ける花の色」のように、

あれこれと様々な物思いをするころだと詠ずるのに対し、586は秋風にかきなす琴の音にまでどうしてむなしくあの人が恋しいのだろう、つまり琴の音のせいでも、物思いをさせられると、いずれももの思いをする人物を詠じて対応する。584は「秋の田の稲葉の」という序詞を用い、587は「真孤刈る淀の沢水雨降れば」という序詞を用いて共通する。585は「雲居にのみもなきわたるかな」という表現に「雁が空に鳴いて渡って行く」の意と「うわの空で泣き続ける」の意が掛けられるのに対し、588は「大和に侍りける人につかはしける」という詞書を持つことで、「人づてにのみ聞きわたるかな」という表現に「吉野の山の桜花」について「人づてにのみ聞きわたるかな」という意味と「大和に侍りける人」の噂を「人づてにのみ聞きわたるかな」という意味が重ね合わせられており、いずれも二重の文脈を作る点で共通する。586は「秋風」、589は「風」を詠み込んで共通し、586が「秋風にかきなす琴」の音を聞いて人が恋しく思われると詠ずるのに対し、589は「弥生ばかりに、ものたうびける人のもとに、また人まかりて消息すと聞きて、よみてつかはしける」という詞書を有することから、「風吹くごとに物思ひぞつく」には、「私以外の人から手紙を送られるたびごとに、物思いをすることです」という意味が籠められており、いずれも風によって恋のものの思いが引き起こされていると詠じている点で共通する。587は「つねよりことにまさるわが恋」と詠ずるのに対し、590は「間なく散るとも数はまさらじ」といずれも「まさる」の語を詠み込んで対応する。588は「聞きわたるかな」、591は「恋ひわたるらむ」といずれも第五句に類似した表現を用

ると考えられる。

\*

また、572から578までの歌群は、572と578がいずれも初二句である事柄を提示し、下三句でそれを受けるといふ表現を取り、ともに激しく泣く様を詠じて共通し、573「冬」、577は「春雨」と季節を表す語を詠み込み、いずれも泣く様を詠じて対応する。574と576はともに涙に濡れる「袖」を詠じて対をなす。572から578までの歌群は、575を中心に同心円状に左右対称の対応構造を構成する。

578から586までの歌群は、578は「夜ただなくらむ」、586は「人の恋しかるらむ」と、歌の末尾に現在推量の助動詞「らむ」を用いて共通し、579は「郭公なく音空なる恋もするかな」、585は「心は雁にあらねども雲居にのみもなきわたるかな」と、いずれも鳥が空に鳴く様を詠じつつ、詠み手の泣く様を詠じて対応する。580は「秋霧」、584は「秋の田の稲葉」と秋の景物を詠み込んで対応し、581は「虫のごと声にたててはなかねども」、583は「秋の野に乱れて咲ける花の色のちくさに物を思ふころかな」と「秋の野の虫」や「秋の野に咲く花」を詠み込んで共通する。581が「涙のみこそ下に流るれ」と「のみ」の語を用いるのに対し、583は「ちくさに物を思ふ」と対照的な表現を用いて対をなす。578から586までの歌群は、582を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

586から594までの歌群は、586は「はかなく人の恋しかるらむ」、594は「なにか人を思ひそめけむ」と「人」の語を共有すると

いて対応する。589は「風に吹かれる花」、592は「たぎつ瀬に浮かぶ浮草」といった頼りない景物を用いて心情を表出している点で共通し、590は「自分の恋に比べたら、くらぶの山の桜花が間なく散つてもその数は勝るまい」詠ずるのに対し、593は「かけて思はぬ時の間もなし」つまり私はいつも心に掛けてあなたを思っていると詠じて、ともに相手への思いの強さを詠じて対をなす。591は「冬川の上はこほれる我なれや」という序詞的な表現を用いて、「下にながれて恋ひわたるらむ」という表現を導くのに対して、594は「東路の佐夜の中山」という序詞から「なかなかになにか人を思ひそめけむ」という表現を導くという点で共通する。592は「たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草の」という序詞を用い、595は「人をみるめは生ひずぞありける」という表現を取るが、592の「浮草」と595の「みるめ」がともに水に生える植物であるという点で対応する。593は「よひよひに脱ぎてわが寝る狩衣」、596は「夜の袂」を詠じて対をなし、594は「佐夜の中山」、597は「知らぬ山路」といづれも「山」を詠み込んで対応する。595は「しきたへの枕のしたに海はあれど」、598は「泣く涙」というように、ともに泣く様を詠じ、596は「年を経て」、<sup>2</sup>「夜の袂はなほこほりけり」、597は「年経れば」、<sup>3</sup>「涙」とこれも類似した表現を用い、泣く様を詠じて共通する。597と600は「心」の語を共有して対応する。

このように見てくると、572から600までの歌群は、いずれも三首先に位置する歌と対応関係を有しており、その中心に位置するのが586となる。572から600までの歌群は全ての歌が二首おきの対応関係を持ち、586を中心に左右対称の対応関係を構成してい



ともに、「らむ」、「けむ」という原因推量の助動詞を用いて共通し、587は「真孤刈る淀の沢水雨降れば」、593は「よひよひに脱ぎてわが寝る狩衣」と序詞を用いて対をなす。588は「大和に侍りける人につかはしける」という詞書を持つことで、「人づてにのみ聞きわたるかな」という表現に「吉野の山の桜花」について「人づてにのみ聞きわたるかな」という意味と「大和に侍りける人」の噂を「人づてにのみ聞きわたるかな」という意味が重ね合わせられており、592は「浮草のうきたる恋も我はするかな」という表現に、「浮草が浮いている」意と「浮きたる恋」つまり不安な恋の意が重ねられている点で共通する。589は春の「花」、591は「冬川」を詠じ、589の「もの思ひぞつく」の「思ひ」に「火」が掛けられ、591の「下にながれて」に「心の中で泣かれて」の意が掛けられている点で共通する。586から594までの歌群は、590を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

594から600までの歌群は、594は「なにしか人を思ひそめけむ」、600は「夏虫をなにかいひけむ」と類似した表現を取って対応し、595は「みるめ」、599は「見えし」と詠じて対をなし、596は「夜の袂はなほこほりけり」、598は「袂のみこそ色まさりけれ」とともに涙に濡れた「袂」を詠じて対応する。594から600までの歌群は、597の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

578と594はいずれも586から八首目に位置することから、572から578までの歌群と578から586までの歌群を繋いだ歌群と586から594までの歌群と594から600までの歌群を繋いだ歌群は、586を中心に左

右対称の対応構造を形成する。

さらに、572から577までの歌群は、572は「君恋ふる涙しなくは唐衣胸のあたりは色もえなまし」、576は「いつはりの涙なりせば唐衣忍びに袖はしほらざらまし」といずれも反実仮想の構文を取り、「唐衣胸のあたりは色もえなまし」、「唐衣忍びに袖はしほらざらまし」と対称的な事柄を詠じて対応し、573と577はともに涙を流す様を詠ずると同時に、573が「冬もこほらぬ水泡なりけり」と「冬」、577が「春雨に濡れにし袖と問はばこたへむ」と「春」を詠じて対をなす。572は「涙」、573は「涙川」を詠み込み泣く様を詠じて対をなし、574は「夢路」「夜」の語を詠み込み、575は「夢」「夜」を語を詠み込んで対応し、576と577はともに「袖」の語を詠み泣く様を詠じて共通する。572から577までの歌群は、先に述べたように三首先の歌と対応関係を持つと同時に、四首先の歌とも対応し、572と573、574と575、576と577がそれぞれ対をなしつつ、574と575の対を中心に左右対称の対応関係を形成する。

577から581までの歌群は、577は「音に泣きてひちにしかども」、581は「虫のごと声にたてはなかねども」と類似した表現を取って対応し、577は「春雨」、580は「秋霧」の語を詠み込んで対応する。578は「わがごとくものや悲しき郭公時ぞともなく夜ただなくらむ」、579は「五月山こす多を高み郭公なく音空なる恋もするかな」と、どちらも郭公の鳴く様に自らの恋情を投影し、579は「なく音空なる恋もするかな」、580は「立ち居のそらも思ほえなく」と「空」の語を詠み込んで対をなし、578と580は「時」の語を共有して対応する。578、579、580は三首がそれぞれ

が相互に対応する。578はまた、「わがごとくものや悲しき」と詠じて、581の「虫のごと声にたててはなかねども」という表現と類似した表現を取って対応する。577から581までの歌群は、577が580、581、578が581と対応し、578、579、580の三首が相互に対応することによって、579を中心に左右対称の対応関係を構成する。

581から586までの歌群は、581と586が「声」の語を詠み込んで共通し、582は鹿の鳴く様、585は雁の鳴く様を詠み込んで対をなし、583は「秋の野に乱れて咲ける花の色」、584は「秋の田の稲葉の」といづれも秋の景物を詠じた序詞を用いて対をなす。581から586までの歌群は、583と584の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

586から591までの歌群は、586は「秋風」「はかなく人を恋しかるらむ」、591は「冬川」「下にながれて恋ひわたらむ」と類似した表現を取って対応し、587は「つねよりことにまさるわが恋」、590は「桜花間なく散るとも数はまさらじ」とどちらも「まさる」の語を詠み込んで対応し、588と589はいずれも詞書を有することによって、歌に詠まれた花を思う気持ちの裏に、恋の心情が表現されている点で共通する。586から591までの歌群は、588と589の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成することになるが、この対応関係は、581から586までの歌群の対応関係と同じ形を示す。

591から595までの歌群は、591と595が「下」の語を共有し、591は「下にながれて恋ひわたらむ」、594は「なにしか人を思ひそめけむ」といづれも原因推量の助動詞を用いて共通する。592は「たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草の」、593は「よひよひに脱ぎて

わが寝る狩衣」、594は「東路の佐夜の中山」と、いづれも序詞を用いて三首が相互に対応する。また592は「浮草」595は「海松布」を詠じて共通する。591から595までの歌群は、593を中心に左右対称の対応関係を構成するが、この対応関係は、577から581までの歌群の対応関係と同一である。

595から600までの歌群は、595は「人を見るめ」、599は「白玉と見えし涙」といづれも「見る」の語を詠じて共通し、596は「年を経て消えぬ思ひはありながら」、600は「心から我も思ひに燃えぬべらなり」と、どちらも「思ひ」に「火」を掛けた表現を用いて対応する。

595は「しきたへの枕のしたに海はあれど」、596は「年を経て消えぬ思ひはありながら」と類似した表現を取り、597は自らの恋を「知らぬ山路」に喩え、598は自ら流す涙を布を紅の液の中で激しく振って染める様に喩えて表現している点で対応し、599「白玉」が「唐紅」になった、600は火に身を焼く虫を愚かに思った私が、恋の思いの火に燃えてしまいそうだと、いづれも過去から現在への変化を詠じて対をなす。595から600までの歌群は、先に示したように、三首先の歌と対応関係を持ちつつ、四首先の歌とも対応関係も形成し、595と596、597と598、599と600が対をなし、597と598の対を中心に左右対称の構造を構成するが、この対応関係は、572から577までの歌群の対応関係と全く同一である。

581と591は586からともに五首目に位置し、577と595は586からいづれも九首目に当たることから、572から577までの歌群と577から581までの歌群、581から586までの歌群の三つの歌群を繋いだ572から586までの歌群と586から591までの歌群、591から595までの歌群、595

から600までの歌群の三つの歌群を繋いだ586から600までの歌群は、586を中心に左右対称の対応関係を形成する。

また、577から580までの歌群は、先に578、579、580は三首がそれぞれが相互に対応すると指摘したが、577は「音に泣きてひちにしかども」、578は「時ぞともなく夜ただなくらむ」、579は「なく音空なる恋もするかな」というように、577、578、579の三首もいずれも恋の思いで泣くことを詠じて共通する。さらに、577は「春雨」、580は「秋霧」の語を詠み込んで対をなすことから、577から580までの歌群は四首全てが相互に対応する歌群を形成する。

580から586までの歌群は、580は585と「心」の語を共有するとともに、「秋霧」の語を詠み込んで586の「秋風」の語とも対応する。581は「声」の語を586と共有し、「虫」「なかねども」という表現を取って、585の「雁」「あらねども」「なきわたる」といった表現とも対応する。582は「秋」、583は「秋の野」、584は「秋の田」といずれも「秋」を詠み込んで共通する。582から584までの歌群は、三首がそれぞれ他の二首と対応関係を持ち、その外側に580と585、586、581と585、586が対応するという対応関係を形成する。580から586までの歌群は、583を中心に左右対称の対応関係を形成する。

586から592までの歌群は、586は「秋風」の語を詠み込んで591の「冬川」と対をなし、「はかなく人を恋しかるらむ」と詠じて、592の「うきたる恋も我はするかな」という表現と対応する。587は「真孤刈る淀の沢水雨降れば」という序詞を用いて、591の「冬川の上はこほれる我なれや」と序詞に準じた表現で「下にながれて恋ひわたるらむ」という表現を導く歌と対応し、592の

「たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草の」という序詞を用いた歌とも対応する。588は「吉野の山の桜花」、589は「花」、590は「くらぶの山の桜花」といずれも桜を詠じて、三首が全て対応する。586から592までの歌群は、589を中心に左右対称の構成をなすが、この対応関係は、580から586までの歌群と全く同じ対応関係である。

592から595までの歌群は、592は「たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草の」、593は「よひよひに脱ぎてわが寝る狩衣」、594は「東路の佐夜の中山」といずれも序詞を用いて相互に対応する。595は「みるめ」を詠じて592の「浮草」と対応し、「しきたへの枕」と詠じて593の「よひよひに脱ぎてわが寝る狩衣」という表現と対をなし、「人」の語を詠み込んで594と共通する。592から595までの歌群は、四首全てが相互に対応関係を有する歌群を形成するが、この対応関係は、577から580までの歌群の対応関係と同一である。

580と592は586から六首目に位置する。とすると、577から580までの歌群と580から586までの歌群を繋いだ577から586までの歌群と586から592までの歌群と592から595までの歌群を繋いだ586から595までの歌群までの歌群は、586を中心に左右対称の対応関係を構成する。また既に指摘したように、572から577までの歌群と595から600までの歌群は、586を中心に左右対称の対応関係を形成することから、572から586までの歌群と586から600までの歌群は、586を中心に左右対称の関係を構築することになる。

\*

572から575までの歌群は、572は涙が無かつたら胸が燃える、575は恋しい人を夢で見ると起きるのが辛いと、いずれもある条件のもとであることが起こると詠じて対をなし、573は「涙川」、576は「涙」を詠じて対応する。572から575までの歌群は、573と574の対を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成する。

572から578までの歌群は、575を中心に同心円状に左右対称対応構造をなすことは先に指摘した。

575から582までの歌群は、575と582が「夜」の語を共有し、576が「いつはりの涙なりせば」、581が「涙のみこそ下に流るれ」といずれも「涙」の語を詠じ、577は「春雨に濡れにし袖」、580は「秋霧の晴るる時なき心には」と「春雨」、「秋霧」の語を詠み込んで対をなす。578は「わがごとくものや悲しき郭公時ぞともなく夜ただなくらむ」、579は「五月山こず糸を高め郭公なく音空なる恋もするかな」とともに自らの泣き声を郭公の鳴き声に重ねて詠じて対応する。575から582までの歌群は、578と579の対を中心に、同心円状に左右対称の対応関係を構築する。

576から582までの歌群は、576は「いつはりの涙なりせば唐衣忍びに袖はしほらざらまし」、582は「山とよむまで鳴く鹿に我おとらめや」と、ともに泣く様を詠じて対応し、577は「音に泣きてひちにしかども」、581は「虫のごと声にたてはなかねども」といづれも声を立てて泣くことを詠じ、「ども」という逆接の助動詞を用いて対をなし、578は「時ぞともなく夜ただなくらむ」、580は「秋霧の晴るる時なき心には」と、どちらも「時」の語を詠じて対応する。576から582までの歌群は、579を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成する。

578から586までの歌群は、582を中心に同心円状に左右対称の対応関係を構成することは先に指摘した。

580から586までの歌群は、583を中心に同心円状に左右対称の対応関係をなすことは、先に指摘した。

586から592までの歌群は、589を中心に同心円状に左右対称の構成をなすことは、先に指摘した。

586から594までの歌群は、590を中心に同心円状に左右対称の対応関係を形成することは先に指摘した。

590から596までの歌群は、590は恋の思いはくらぶ山の桜花が散るのよりもっと多い、596ずっと思っている恋の辛さは消せない、とどちらも恋の辛さの甚だしさを詠じ、591は「下にながれて」、595は「枕のしたに海はあれど」と何れも「下」の語を詠み込んで共通する。592は「たぎつ瀬に根ざしとどめぬ浮草の」、594は「東路の佐夜の中山」と序詞を用いて共通する。590から596までの歌群は、593を中心に同心円状に左右対称の構成をなす。

590から597までの歌群は、590は「わが恋にくらぶの山の桜花」、597は「わが恋は知らぬ山路にあらなく」と、どちらも歌の冒頭に「わが恋」という表現を置き、「山」を詠じて対応し、591は「冬川の上はこほれる我なれや」、596は「夜の袂はなほこほりけり」といづれも「こほる」の語を詠み込んで対をなし、592は「浮草」、595は「海松布」を詠じて対をなす。593は「よひよひに脱ぎてわが寝る狩衣」、594は「東路の佐夜の中山」といづれも序詞を用いて共通する。590から597までの歌群は、593と594の対を中心に同心円状に左右対称の構成を形成する。

594から600までの歌群は、597を中心に同心円状に左右対称の対

応関係を構成することは、既に指摘した。  
 597から600までの歌群は、598と599の対を中心に同心円状に左右対称の構成をなすことも、既に指摘した。

\*

578から586までの歌群、580から586までの歌群と586から592までの歌群、586から594までの歌群は、その歌群の最後または最初の歌が586であることから、586を中心に左右対称の対応関係を形成する。

575から582までの歌群、576から582までの歌群と590から596までの歌群、590から597までの歌群は、582と590が586から四首目にあることから、それぞれ586を中心に左右対称の対応関係を形成する。

572から578までの歌群と594から600までの歌群は、578と594が586から八首目にあることから、586を中心に左右対称の対応関係を形成する。

572から575までの歌群と597から600までの歌群は、575と597が586から十一首目に位置するから、572から575までの歌群と597から600までの歌群は、586を中心に左右対称の対応関係を構成する。

以上、572から600までの歌群の間には様々な形の左右対称の対応関係が形成されるが、それらはいずれも586を中心に左右対称の対応関係を有しており、572から600までの歌群は図8に示すように、壮大な左右対称構造を形成している。

続いて、600から608までの歌群を示してみよう。

(題しらず)

みつね

600 夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひに燃えぬべらなり

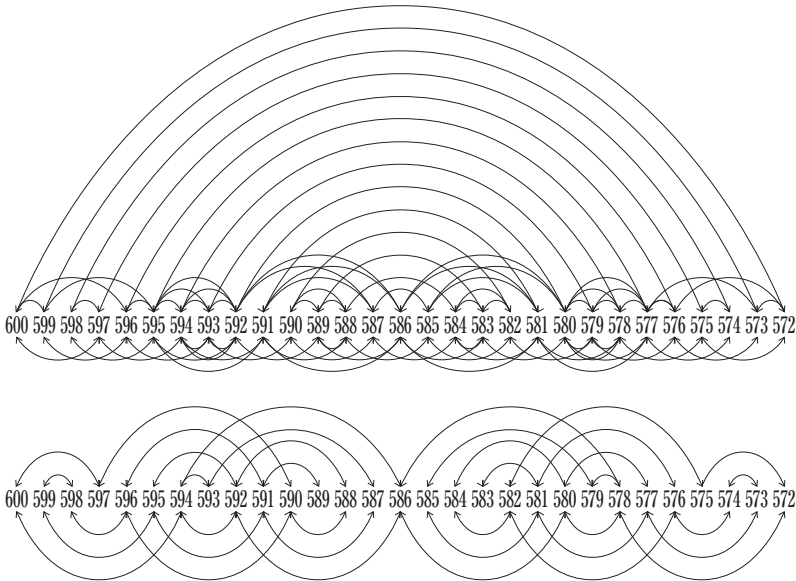


図8

ただみね

601 風吹けば峰にわかるる白雲の絶えてつれなき君が心か

602 月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれと  
や見む

ふかやぶ

603 恋ひ死なば誰が名はたたじ世の中のつねなきものと言ひ  
はなすとも

つらゆき

604 津の国の難波の葦のめはるに繁きわが恋人知るらめや  
605 手も触れで月日経にける白檀弓起きふし夜はいこそねら  
れね

606 人知れぬ思ひのみこそわびしけれわが嘆きをば我のみぞ  
知る

ともり

607 言にいでて言はぬばかりぞ水無瀬河下にかよひて恋しき  
もの

みつね

608 君をのみ思ひ寝に寝し夢なればわが心から見つるなりけ  
り

600 から 608 までの歌群は、600 と 601、608 は「心」の語を共有し、607 は「心」の意を持つ「下」の語を詠み込んで四首それぞれが相互に対応し、604 を中心に左右対称の対応関係を構成する。602 は「つれなき人」、604 は「人知るらめや」、606 は「人知れぬ思ひ」といづれも「人」の語を詠み込み、かつ自らの思いを恋しい人に知られない状況を詠じて、三首が相互に対応し、604 を中心に

左右対称の対応構造を構成する。

601 は「風吹けば峰にわかるる白雲の」、605 は「手も触れで月日経にける白檀弓」といづれも「白」の語を詠み込んだ序詞を用いて共通し、602 は右に述べたように「人」の語を詠み込んで

606 と対応し、603 は「世の中のつねなきものと言ひはなすとも」、607 は「言にいでて言はぬばかりぞ」と、ともに「言ふ」の語を詠み込んで対をなす。601、602、603 はいづれも四首先の 605、606、607 と対応し、604 を中心に左右対称の対応関係を形成する。

さらに、600 は「夏虫をなにかいひけむ」、603 は「世の中のつねなきものと言ひはなすとも」、607 は「言にいでて言はぬばかりぞ」と、「言ふ」の語を詠じて対応し、608 は「君をのみ思ひ寝に寝し」、605 は「夜はいこそねられね」と「寝」という動詞を共有し、605 と 601 は既に指摘したように、「白」の語を詠み込んだ序詞を用いて対応する。600、603、607 の対応関係と 601、605、608 の対応関係は、604 を中心に左右対称の対応関係を形成する。

600 から 608 までの歌群は図 9 に示すように、604 を中心に左右対称の対応関係を形成する。

608 から恋の部三の巻頭歌 616 までの歌群を示すと、以下のようになる。

(題しらず)

みつね

608 君をのみ思ひ寝に寝し夢なればわが心から見つるなりけり

609 命にもまさりて惜しくあるものは見はてぬ夢の覚むるなりけり  
ただみね

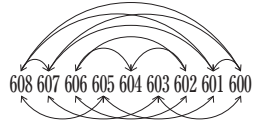


図 9

610 梓弓ひけば本末わが方によるこそまされ恋の心は  
春道列樹  
みつね

611 わが恋はゆくへも知らずはてもなし逢ふを限りと思ふば  
かりぞ

612 我のみぞ悲しかりける彦星も逢はですぐせる年しなけれ  
ば  
ふかやぶ

613 今はや恋ひ死なましをあひ見むと頼めしことぞ命なり  
ける  
みつね

614 頼めつつ逢はで年経るいつはりに懲りぬ心を人は知らな  
む  
ものり

615 命やはなにぞは露のあだものを逢ふにしかへば惜しから  
なく

弥生の朔日より、忍びに人にも言ひて、のちに、  
雨のそほ降りけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

616 起きもせず寝もせで夜をあかしては春のものとてながめ  
くらしつ

608 から616までの歌群は、608は「君をのみ思ひ寝に寝し」、616は  
起きもせず寝もせで」といづれも「寝」という動詞を詠み込ん  
で共通し、609、615は「命」、「惜し」の語を詠じて共通する。610  
と614は「心」の語を詠み込んで対応し、611は「逢ふ」、613は  
「あひ見む」という表現を用いて対をなす。608から616までの歌  
群は、612を中心に同心円状に左右対称の対応構造を構成する。

608 から614までの歌群は、608と614が「心」、609と613が「命」の  
語を共有し、610が「よるこそまされ恋の心は」、612が「我のみ  
ぞ悲しかりける」といづれもあることに限定した表現を用いて  
対応する。608から614までの歌群は、611を中心に同心円状に左右  
対称の対応関係を形成する。

610 から616までの歌群は、610と616が「夜」、611と615が「逢ふ」、  
612と614は「逢ふ」の語の他に「年」の語を共有して、613を中心  
に同心円状に左右対称の構造をなす。

なお、608と609は「夢」の語を共有し、「見つるなりけり」「覚  
むるなりけり」と第五句が類似した表現を取って対をなし、615  
は「あだもの」、616は「春のもの」と類似した表現を取って対  
をなす。

608から616までの歌群は、612を中心に同心円状に左右対称の構  
造をなし、かつ608から614までの歌群は611を中心に同心円状の左

右対称の対応をなし、610から616までの歌群も613を中心同心円状の左右対称構造をなす。ただし、これら二つの左右対称の対応構造は、612を中心に左右対称の関係を有しており、608から616までの歌群が612を中心に左右対称の対応構造を形成していることにかわりはない。以上の対応関係を図示すると、**図10**となる。  
 なお、608から615までの歌群に範囲を限ると、「心」と「命」の語が、611を中心に左右対称の形で配置されていることも認められる。

『古今集』恋の部一の巻軸歌551から『古今集』恋の部二に収められた歌を全て含み、恋の部三の巻軸歌616まで続く歌群は、551から560までの歌群、560から572までの歌群、572から600までの歌群、600から608までの歌群、608から616までの歌群という五つの左右対称の対応関係を持つ歌群によって構成される。『古今集』春上の巻軸歌から恋の部一の巻軸歌まで続いてきた対応関係は、551と560、560と572、572と600、600と608、608と616が対応することによって、恋の部三の巻軸歌616に引き継がれることになる。

注1 『古今集』の本文は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

(本学教授)

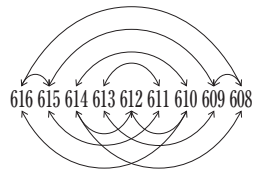


図10